

# 行政視察報告書

報告者 新政たかやま・伊東寿充

## 1. 視察期間

令和8年2月11日（水）

## 2. 視察先

浅間縄文ミュージアム

（長野県北佐久郡御代田町）

※複合文化施設

「まなびの館エコールみよた」内



## 3. 視察項目

支所地域における歴史文化施設の在り方について

## 4. 視察の目的

人口減少と財政制約が進む中で、支所地域における歴史文化施設をどのように位置付け、教育や地域振興にどう生かしていくかを学ぶため視察を行った。

## 5. 視察内容

### ア. 概要

浅間縄文ミュージアムは、縄文時代に特化した町立博物館であり、河原田遺跡から出土した縄文中期（約5,000年前）の土器群（国指定重要文化財）を中心に展示している。

施設は単独ではなく、中央公民館・図書館・教育委員会を併設した「まなびの館エコールみよた」の中に位置付けられており、教育・社会教育・文化機能が一体となった構成となっている。

展示は1階の縄文文化展示に加え、2階には浅間山の噴火の歴史や地形形成などを紹介する自然史展示があり、地域の成り立ちを総合的に学べる内容となっている。

また、本施設の特徴として体験学習が充実しており、

- 土器づくり
- 勾玉づくり
- 縄文アンギン織り
- 火起こし体験

などが行われ、子どもから大人まで参加できる「体験する博物館」として機能している。



来館者は年間約2万5千人で、隣町の軽井沢町にある東京都区立の保養施設を利用する小学校の見学など、広域からの利用もある。

人員体制は学芸員1名を含む5名で運営されており、限られた体制の中で展示・解説・体験事業を行っている。

さらに説明の中で印象的であったのは、縄文土器の様式が北陸・新潟・信州だけでなく飛騨地域とも共通性を持つ点であり、山を越えた文化交流の存在が示されていたことである。高山市の堂之上遺跡などとも時期的に重なることから、飛騨地域が縄文文化の交流拠点であった可能性にも触れられた。



### イ. 効果

まず、博物館・図書館・公民館・教育委員会が一体となっていることで、「地域の学びの拠点」として機能している点大きい。また、体験学習が充実していることで、単なる展示にとどまらず、実感を伴った学びにつながっている。さらに、軽井沢町との地理的関係を生かし、都市部の学校利用を取り込んでいる点は、支所地域における施設活用の一つのモデルであると感じた。加えて、縄文文化と飛騨地域とのつながりを示す展示は、地域を越えた歴史認識を生み出す点でも意義が大きい。



### ウ. 課題

開館から20年以上が経過し、展示内容の大きな更新は行われていないとのことであり、今後の魅力向上が課題である。また、学芸員1名体制は負担が大きく、専門的な研究・発信を継続していく上で体制強化の必要性を感じた。広域からの来館がある一方で、それを戦略的に伸ばす仕組みづくりにも余地があると考える。

## 6. 考察

今回の視察を通じて感じたのは、歴史文化施設は単なる展示施設ではなく、「地域の成り立ちを総合的に学ぶ拠点」として位置付けることが重要であるという点である。御代田町では、縄文文化と浅間山の自然史をあわせて展示することで、人の暮らしと自然環境の関係を一体的に伝えていた。



また、飛騨地域との文化的つながりが示されていたことは、本市にとっても非常に示唆に富むものであり、地域を越えた視点で歴史を捉える重要性を感じた。本市においても、縄文遺跡や森林文化といった資源を有しており、これらを

- 教育機能と結びつけること
- 体験学習として提供すること
- 広域文化圏の中で位置付けること

が求められる。

特に支所地域においては、施設を単独で維持するのではなく、複合化による効率化と学びの機能強化を図ることが重要である。

今回の視察は、「地域の歴史をどう伝えるか」だけでなく、「地域の価値をどう再認識するか」という点において、大変有意義なものであった。